

仏伝図と講式

— 仏生会講式を出発点として —

渡 邊 里 志

一 釈迦が入滅する場面を中心にして入滅前後に起こった事跡を周圍に

描いた涅槃變相図は、明恵上人が編纂した『四座講式』のうちの『涅槃講式』の本文に良く一致することが知られている。涅槃變相図と『涅槃講式』は、ともに涅槃會（常樂會）で用いられるもので、その使用される場が共通しており、また内容の一致する部分においても、ともに唐・若那跋陀羅訳『大般涅槃經後分』や蕭齊・曇景訳『摩訶摩耶經』といった漢訳經典が主な出典となっており、共通する典拠が確認されている。涅槃變相図は、『大般涅槃經後分』『摩訶摩耶經』あるいは『涅槃講式』を典拠として制作されたと考えられ、これらは涅槃會（常樂會）という法會を通して密接に結びついていたと言える。

ところで、講式とは「講」の「式」であり、「講」の式次第とされる。「講」とは、本来は經典や論疏の内容をわかりやすく説くための法會であるが、この法會に参加するものたちは同じ信仰内容をもって、やがて同じ信仰を持つ集団も講と呼ばれるようになり、仏・菩薩・高僧などを贊嘆する儀式となった。この儀式においては、信仰の礼拝対象となる尊像を描いた画像、あるいは彫像などを本尊とし、この本尊を前にして声明を唱え式文を読み劇的作法を実演するもので

ある。全体として総合的な仏教芸術であるとも指摘されている。講式の編纂にあたっては、漢訳經典や論疏が参照されており、本尊となる仏像や仏畫の典拠とも共通しているので、本尊の表現と講式の本文とは必然的に内容が一致することとなる。

現在こうした講式としては、仏・菩薩・明王・天といった仏教尊像のみならず、祖師、神祇、經典などをも礼拝対象としたものが知られている。その本尊は、多くは繪畫であつたようであるが、彫刻の場合もある。本尊と講式との關係も一樣でないことが予想される。これまでに佛教繪畫と講式との關係を積極的に取りあげた考察として、梶谷亮治氏、谷口耕生氏らの研究が挙げられる。本小論では、試みに明恵による『仏生会講式』を出発点として、貞慶による『欣求靈山講式』など他の講式にも言及しながら、仏伝図との關係を考察し、さらに仏伝涅槃圖の成立にも言及してみたいと思う。

二

はじめに明恵の『仏生会講式』を取りあげたい。『仏生会講式』は、明恵が、仏生会で用いるために元仁二年（一二三三）四月七日に草した講式である。その奥書によると、

沙門高弁從幼年昔修涅槃會。仍不弁其年數、遂成大會、貴賤群集。

於仏生会者、以式講、自今年始修之。仍爲明日所修、率爾草之。
于時元仁二年乙酉四月七日未刻於楞伽山羅婆坊記之。

とあり、これまで行ってきた涅槃会に群衆が集まる大きな法会になったので、今年からは講式を作って仏生会を始めることにしたということである。楞伽山は梅尾にある明恵が名付けた山で、羅婆坊はその山の下方にあった庵室である。この事跡は、また明恵の伝記である『高山寺明恵上人行状』（仮名行状）にも記されている。すなわち、

然ニ涅槃会ハ、数年ヲツムトイヘトモ、仏生会ハコレヲオコナウス、經ニ欲令衆生歡喜故出現於世、欲令衆生憂悲感慕故示現涅槃ト説カ故ニ如来誕生ノ日ハ衆生歡喜ノ縁ヲ示スニ、心ヲ快クシテ、必シテコレヲ好ミヲコナハムトセサリキ、然ト云テ黙シテヤムヘキニアラサルニヨテ、上人自ラ仏生会ノ式一卷ヲ撰シテ元仁二年ノ四月八日ヨリコレヲ行ヒ始ム

とある。ここに見られる「經ニ欲令衆生歡喜故出現於世、欲令衆生憂悲感慕故示現涅槃」という文章は、『仏生会講式』の表白文にも取りあげられている。すなわち、

華嚴經文云、欲令衆生歡喜故出現於世。欲令衆生憂悲感慕故示現涅槃云云。其歡喜之縁者四月八日誕生也。其憂悲之縁者一月十五日入滅也。

と述べられている。ここにいう『華嚴經』とは東晋・仏陀跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』（六〇巻本）であり、卷三六にある「如来欲令衆生歡喜故。出現於世。欲令衆生憂悲感慕故。示現涅槃。其實如来無有出世。亦無涅槃。何以故。如来常住如法界故。爲化衆生示現涅槃。」という文章によるものである。如来は衆生を歡喜させるために世に出現し、衆生を憂悲感慕させるために涅槃を示現したのである。如来には出世も涅槃も無く、如来は法界のごとく常住であり、衆生を化すために涅槃を示現したのだと説かれている。明恵は、經文に歡喜の縁としての誕生と憂悲の縁としての入滅が説かれているにも関わらず、涅槃会

仏伝図と講式

のみ行っていて仏生会を行っていなかったことに気づいて、自ら講式を撰して仏生会を始めたとしている。

明恵は、すでに建保三年（一二二五）梅尾高山寺において『四座講式』を作って涅槃会を行っており、恒例行事となっていた。次第に群衆が集まるようになって問題が起きたので、寛喜二年（一二三〇）より『涅槃講式』のみ行うことになった。『仏生会講式』は、高山寺の涅槃会に群衆が押しかけるようになってから作られており、仏生会を行うことにより群衆が分散することを期待したという指摘もあるが、涅槃会と仏生会が本来一対の法会であるべきであるという考えが背景にあったことを指摘できよう。仏生会にはじまり涅槃会で完結しこれを繰り返すというサイクルが意識されていたのではないだろうか。

さて、これから『仏生会講式』における仏伝の記事を検討していきたい。『仏生会講式』の式文は五段式である。まず、式文第一「挙降神誕生瑞相」は、釈迦の誕生を中心とした内容である。以下、仏伝の事跡をへゝに示しつつ本文を紹介していきたい。

〈兜率天説法〉

菩薩在兜率天、満足定寿四千歳。

〈托胎〉

以四月八日曉、明星出時、化乘白象、從摩耶右脇入。

〈住胎〉

住母胎間、説法利生、更無障礙。晨朝爲色界諸天説法、日中爲欲界諸天説法、晡時爲諸鬼神衆説法、於夜三時中説法利生、亦復如是。

〈右脇誕生〉

遂則以四月八日日出時、於藍毘尼園無憂樹下、從夫人右脇生。

〈七步・獅子吼〉

自舉右手、於十方行七步、大師吼唱言、天上天下唯我独尊云云。

〈二龍灌水洗〉

仏伝図と講式

面貌恰悦、梵音哀雅、宝華承足、四王接身、帝釈執蓋、梵王持拂。二龍吐靈水、温涼分味。八部滿虚空、伎樂列音。當此時生死海中、立解脱之橋梁、煩惱病之床雨般若之良藥。歡喜悅豫、可唱伽陀、行禮拜。

となる。ここには、釈迦の兜率天説法から、托胎・住胎・誕生・七歩・獅子吼・灌水が述べられており、特に住胎と灌水が詳しく説かれているところが特色であろう。

式文第二「挙出家成道儀式」には、さらに釈迦の幼少期から初説法までの事跡が説かれる。すなわち、

〈遊樂〉

太子在王宮、深厭欲樂、專欣修道。

〈出家踰城〉

生年十九出家。時至以二月八日夜半、不重金輪宝位、輕棄六万采女令車匿騎健陟、至仙人苦行林中。

〈山中別離・帰還〉

即下馬撫背而語曰、我出樊籠、去羈鎖。是汝之力也。又語車匿曰、隨有勢之人、世間之常習也。我今出王宮。汝一人隨我、尤為難有。汝可与健陟俱還王宮。車匿聞此語、拳音悲哭。健陟屈膝、舐太子御足、流淚如雨。車匿白言、太子久長深宮、所從如兩。何单已、独棲山林。太子答曰、生死習、独生独死。何必有伴。我若断結使、以衆生為伴侶。車匿抑淚、牽馬而還。

〈降魔〉

其後捨三仙邪道、守一実正法。生年滿三十、以二月八夜曉、降伏四魔、

〈成道〉

成等正覺。

〈梵天勸請・初説法〉

受梵釈請、初転法輪。世界灑甘露法雨、衆生潤枯竭心穢。歡喜踊

躍、可唱伽陀、行禮拜。

となる。ここには、遊樂・出家踰城・山中別離・帰還・降魔・成道・初説法が説かれている。出家したあと車匿・健陟が釈迦と別離する情景が詳しく述べられているところが特徴的である。

式文第三「誕生出家遺跡」には、釈迦の誕生から出家までの事跡が起こった場所を遺跡として紹介している。すなわち、

〈靈鷲山・菩提樹下正覺之宝座〉

靈鷲山上有説法華之聖跡、菩提樹下有成正覺之宝座。

〈迦毘羅城争芸所の泉〉

如來昔為太子時、於迦毘羅城、与諸釈争芸、射鉄鼓。其箭穿鼓、入地、其跡涌清流。有諸病人、飲浴多愈。土俗名之箭泉。

〈藍毘尼蘭誕生処〉

其東北行八十九里、至藍毘尼蘭。有釈種浴池。澄清皎鏡、雜花彌滿。其北二十四五步有無憂花樹。今已枯挨。菩薩誕生処也。

〈同灌水処〉

次東有率都婆、二龍浴太子所也。乃至帝釈接太子、四王抱太子、二龍濯出地、摩耶沐浴河、隣次在之。

〈藍摩国別離処〉

又藍摩国沙彌伽藍東、大林中、行百余里、有大率都婆。是太子夜半踰城、遲明至此。解宝衣、去瓔珞、令車匿還王宮処也。

となる。単なる釈迦の伝説を述べるだけでなく、玄奘の旅記である『大唐西域記』を出典として、釈迦が活動していた場所を遺跡として詳細に紹介している。仏伝を遺跡として捉えていく考えは、巡礼の思想と通ずるものであり、同じく明恵が作った『遺跡講式』に典型的に見られる特徴である。こうした遺跡を重視する考え方は、貞慶の『欣求靈山講式』にもうかがうことができ、当時の一つの仏伝のとりえ方であったと思われる。

三

ここで、貞慶の『欣求靈山講式』を取りあげたい。『欣求靈山講式』は、貞慶が建久七年（一一九六）秋月中旬に作った講式である。すなわち奥書に、

建久七年秋月中旬比、於笠置山般若台菴室草之。依同法等勸也。

事非常途雖悼軼毀、若有同志之人者、願會靈山矣。

とあり、笠置寺の般若台の庵室で草された講式である。般若台は、貞慶が建久六年（一一九五）に創建したもので、六角経台を置き、『大般若経』（唐・玄奘訳『大般若波羅蜜多経』、以下同じ）六〇〇巻及び、釈迦・文殊・弥勒像と仏舎利を安置した。貞慶は、建久三年（一一九二）に興福寺を出て隠遁することを決意し、翌年に笠置寺に移り般若台を創建した。この講式は般若台創建の直後に作られたもので、この般若台において靈山会を行う際に用いられたものと考えられる。

この講式は七段式である。仏伝と関わりのある記述は次の通りである。まず式文第一「述釈尊化縁」に、

梵網經云、下生南閻浮提迦夷羅洹國。母名摩耶、父字白淨。吾名悉達。七歲出家、三十成道。

という引用がある。『梵網經』（姚秦・鳩摩羅什訳『梵網經』）の文章を挙げて、釈迦が母摩耶夫人と父白淨王のもとに生まれ、七歳で出家し三〇歳で成道したことが述べられている。

また、

依法花經、五百塵点久遠劫間、我常在此娑婆世界、說法子教化。

——中略——夫釈迦如来者、本是娑婆世界流轉凡夫也。昔於釈迦牟尼佛所、初發菩提心。逢宝藏如来、重建五百大願以来、僧祇苦行之間、久住此界。界滿成道之時、還出本土。智証如来十六王子、十方世界各唱正覺。第十六我釈迦牟尼仏、於娑婆国土、成阿耨菩

仏伝図と講式

提

と記述され、『法華經』（姚秦・鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』、以下同じ）や『悲華經』（北涼・曇無讖訳『悲華經』）の説を挙げて、釈迦が娑婆世界で成仏し説法教化していることを述べる。釈迦は娑婆世界を流轉して教化しており、常に靈鷲山にいたので、靈山淨土を求めるべきであるとする。

次に式文第二「述淨土相属」において、

仏於鷲峰山、説大般若經之時、其土忽變為瑠璃地、八功德水、七宝階陛。花菓草木、咸說法輪。唯有菩薩自十方來。衆宝蓮花、如車輪量。即見此如来处大衆会、為菩薩衆、説其深法。

と述べ、釈迦が靈鷲山で『大般若経』を説いたときに、極樂淨土のごとく変じたことを述べる。これは一時的な化現ではなく、常に靈鷲山は淨土であるとする。式文第三「述練若功能」、式文第四「述勝地靈相」において、靈鷲山は修行にも優れたところであることを述べ、式文第五「述在世遺跡」において、靈鷲山にある遺跡を『大唐西域記』を典拠として紹介する。すなわち、

大唐西域記云、法王御世、垂五十年、多居此山、広説妙法。其山頂、則東西長、南北狭。臨崖西陲有輶精舍。高広奇製、東闢其戸。如来在昔多居説法、今作説法之像。量等如来之身。

と述べ、靈鷲山の山頂の崖の西に煉瓦の精舎があり、釈迦と等身大の説法像があるとする。また、

其南崖下有窣堵婆。如来於此、説法花經之处。

と述べ、精舎の南の崖下に窣堵婆があって、『法華經』を説いた場所であることを紹介する。また、

東北石洞中有大盤石。是如来晒袈裟之处。衣文明徹皎如彫刻文。

自余聖跡然、可觀焉。

と述べ、精舎の東北の石の谷間に大きな石があり、釈迦が袈裟を晒して乾かした石であることを紹介する。衣の文様は明瞭で彫刻した様で

仏伝図と講式

あると述べるところを見ると、この石には袈裟の形に彫刻が施してあったのかもしれない。

また、善無畏の伝記における靈鷲山の事跡をあげる。すなわち、善無畏三蔵、昔結夏於靈鷲之時、猛獸前導深入山穴。穴明如昼。見牟尼尊像左右侍者如生焉。緯之奇異、相似彼龍窟仏影歟。我等何日親見如此事。彼退凡下乘之路、思四衆來会之昔儀。

と述べ、善無畏がかつて靈鷲山に滞在したとき猛獸に導かれて山の洞穴にはいると昼間のように明るく、左右に侍者を伴った釈迦の姿を見たという。この事跡は、「龍窟仏影」と似ていると指摘する。「龍窟仏影」は、東晋・仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海經』卷七に説かれるもので、釈迦が毒龍を降伏させ、龍王のために洞窟中に仏影を留めたという事跡である。「退凡・下乘」という語句も、『大唐西域記』にあるもので、靈鷲山に登山する道の途中にあった卒塔婆の名称である（後述）。また、

當初阿闍世王、為奉如來、自造宝花、空及涅槃之後、泣獻靈山之坐。于時世尊端坐、如昔哀愍誠心。受花授記、

と述べ、西晋・法炬訳『阿闍世王授決經』に説かれる阿闍世王が記を授かった事跡を紹介する。阿闍世王は釈迦を供養しようと宝花を作つて靈鷲山に詣でたところ、すでに釈迦は入滅していなかったが、仏が現れて記を授けられたというものである。

式文第六「述宝塔利益」において、

如來將説心地觀。万字胸間、放大光明、名之諸菩薩不退転。釈迦如來初發心來、三僧祇劫無數難行、一代八相種々化儀、乃至滅後八宝塔、其光之中怨然影現。耆闍崛山般若塔者、是其一也。所謂説大般若法花一乘心地觀經等大乘之地、如來滅後、起立其塔也。と述べる。すなわち、『心地觀』に説かれるように、釈迦が胸の万字から大光明を發して、八相の化儀や滅後の八宝塔を現したが、耆闍崛山の般若塔は八宝塔の一つであり、『大般若經』『法華經』『一乘心地

觀經』などの大乘經典を説いたところに建てられた塔であるという。『心地觀』『一乘心地觀經』とは唐・般若訳『大乘本生心地觀經』のこととて、この事跡は『大乘本生心地觀經』卷一に説かれるものである。すなわち、

此光中影現如來不可思議八大寶塔。拘娑羅國淨飯王宮生處寶塔。摩伽陀國伽耶城邊菩提樹下成佛寶塔。波羅奈國鹿野園中初轉法輪度人寶塔。舍衛國中給孤獨園與諸外道六月論議得一切智聲名寶塔。安達羅國曲女城邊昇切利天為母說法共梵天王及天帝釋十二萬衆從三十三天現三道寶階下閻浮時神異寶塔。摩竭陀國王舍城邊耆闍崛山説大般若法華一乘心地經等大乘寶塔。毘舍離國菴羅衛林維摩長者不可思議現疾寶塔。拘尸那國跋提河邊。娑羅林中圓寂寶塔。如是八塔大聖化儀。人天有情所歸依處。供養恭敬為成佛因。と述べられ、また続く偈の中にも、

又此光中現八塔 皆是衆生良福田
淨飯王宮生處塔 菩提樹下成佛塔
鹿野園中法輪塔 給孤獨園名稱塔
曲女城邊寶階塔 耆闍崛山般若塔
菴羅衛林維摩塔 娑羅林中圓寂塔
如是世尊八寶塔 諸天龍神常供養
金剛密跡四天王 晝夜護持恒不離
若造八塔而供養 現身福壽自延長
增長智慧衆所尊 世出世願皆圓滿
若人禮拜及心念 如是八塔不思議
と説かれている。釈迦が耆闍崛山で説法しているときに、大光明を發して、八相（仏伝）や八大宝塔を出現させたという。講式においては、八大宝塔のうち般若塔が紹介されるのみであったが、經典にはすべてが説かれている。これらの經文を根拠として、
如來塔廟、滅後無量功德最上。不如八塔。

と述べ、八塔には無量の功德があることを主張している。

こうした八塔（八大宝塔、八大靈塔）は、明恵の『十無尽院舎利講式』や『四座講式』のうちの『遺跡講式』のなかに八塔すべてが紹介されている。すなわち、『遺跡講式』によると、

浄飯王宮生処塔 菩提樹下成仏塔

荒（鹿）野園中法輪塔 給孤獨園名称塔

林（曲）如城迦宝階塔 耆闍崛山般若塔

庵羅衛林維摩塔 沙羅林中圓乎（寂）塔

とあり、『大乘本生心地観経』巻一における偈に説かれた八塔と全く一致する。八塔とは、釈迦が奇瑞を起こした場所に建てられた塔を八カ所選んで組み合わせたもので、カピラヴァストウ（ルンビニー）の生処塔、ブッダガヤの成仏塔、ヴァーラーナシーの鹿野園の法輪塔、コーサラ国シュラーヴァステイー（舎衛城）の給孤獨園の名称塔、サンカーシヤの曲如（女）城の宝階塔、マガダ国ラージャグリハ（王舎城）の耆闍崛山の般若塔、ヴァイシャーリーの維摩塔、クシナガラのパリ寂塔となる。

貞慶・明恵ともに八塔信仰を背景としていることがわかるが、貞慶は八塔のうちでも特に靈鷲山を重視して『欣求靈山講式』を作り、靈山会を行ったということが明らかであろう。

四

これまで『仏生会講式』を出発点としていくつかの講式を取りあげ、仏伝の記事を述べた。以下では、これらの講式と仏伝図との関係を考えてみたい。

はじめに、『仏生会講式』と仏伝図の関係を考えてみたい。言うまでもなく『仏生会講式』は、仏生会を行うときに用いられるものである。大乗寺の『仏生会講式』には、

仏伝図と講式

莊嚴道場、正面安置誕生像。

とあるので、仏生会においては誕生釈迦仏が正式な本尊として用いられていたことがわかる。仏生会には一般的には影像としての誕生釈迦仏が用いられていたと言えるが、和歌山・金剛峯寺には鎌倉時代に制作された釈迦誕生図があり、すでに泉武夫氏により『仏生会講式』との関係が指摘されている。この画像は、画面中央に誕生釈迦仏と同じ姿の釈迦像が描かれ、その周囲に誕生時に起こった奇瑞が合わせて描かれている。この画像には、摩耶夫人の右脇から誕生する場面は描かれず、獅子吼する誕生釈迦仏に二龍が灌水する情景が大きく描かれている。先に見たとおり、『仏生会講式』においては、二龍灌水の情景が詳しく述べられており、これらの講式と画像は密接に結びついているものと思われる。仏生会の本尊として用いられたと考えて良いと思われる。

しかしながら、『仏生会講式』には誕生だけではなく、初説法までの釈迦の半生が記述されており、釈迦八相図や仏伝涅槃図などの画像が多数存在していることを考慮すると、これらの画像と講式の関係も検討してみる価値はあろう。まず、三重・大福田寺にある釈迦八相成道図は、一面のなかに仏伝の諸場面が均等に配置されて描かれているものである。この作例に於いては、画面の中央やや下方に、誕生釈迦仏と二龍灌水の場面が描かれ、その上に降魔、さらに中央上端に説法の場面が描かれている。大福田寺本は、諸場面は均等な扱いではあるが、描かれる位置によって場面に与えられた重要性の差を見いだすことができる。『仏生会講式』の本文は必ずしも釈迦八相図の場面を詳しく説明するようなものではないが、このような中央の場面の並び方は、『仏生会講式』における釈迦誕生のとらえ方をよく反映させていると考えられる。大福田寺本が仏生会の本尊として用いられた可能性はなきにしもあらずといえる。

釈迦八相図は、大福田寺本のほかにも、京都・個人蔵本（一幅完結）、

仏伝図と講式

滋賀・常楽寺本（七幅）、広島・持光寺本（八幅）など多数ある。これらの釈迦八相図がどのような目的で使用されたかは明らかではないが、その一つの可能性として、仏生会を想定することが可能であろう。わが国の誕生釈迦仏は、右手を挙げ左手を下ろし「天上天下唯我独尊」と獅子吼する姿に表すことが一般的である。この獅子吼は、釈迦が成長した後偉業を成し遂げるであろうことを予測させるものであり、釈迦八相図はその偉業を示すのに都合がよいものである。釈迦が摩耶夫人の右脇から生まれた場面よりも、獅子吼する場面の方が救済者としての役割をよく示している。釈迦八相図は、誕生釈迦仏と有機的に結びついて用いられた可能性を指摘できよう。静岡・MOA美術館の釈迦八相図（四幅）は、もともと仏伝涅槃図の左右辺の区画が切り離されたものであるが、『仏生会講式』と対比してみると、場面選択はほぼ一致する。釈迦八相図のなかには四門出遊が大きく描かれているが、『仏生会講式』に説かれた遊楽の一情景として描かれたものと考えられる。仏伝涅槃図は、福井・剣神社本を始めとして多数伝わっているが、少なくとも剣神社本や鹿児島・龍巖寺本、東京国立博物館本、兵庫・高蔵寺本などの仏伝涅槃図の周縁に描かれた仏伝図は、場面選択の点で『仏生会講式』の仏伝とほぼ一致している。

剣神社本には、室町時代に書写された明恵の『涅槃講式』が附属して伝わっており、涅槃会で用いられたことが明らかである。鹿児島・龍巖寺本は、中央が涅槃図でなく涅槃変相図であり、やはり明恵の『涅槃講式』と関係づけられる。こうした仏伝涅槃図は中央に大きく涅槃図が表されている以上、涅槃会で用いられたことは確かであろう。明恵の『涅槃講式』には

凡如来一代八十箇年。迦韋誕生、伽耶成道、鷲峯說法、双林入滅。というように、簡潔に釈迦の四相を示すのみで、具体的な仏伝の記述はない。涅槃図に仏伝図が必要となった理由は『涅槃講式』からはうかがうことはできない。涅槃図に仏伝図が付加された経緯については

何らかの他の要因があったのかもしれないが、現状では不明といわざるをえない。こうした状況の中で、本小論に於いてもうひとつの仮説を提示したい。すなわち、まずは仏生会において、本尊画像として、あるいは本尊の誕生釈迦仏と有機的に組み合わせられて釈迦八相図が使用されるようになる。仏生会は涅槃会と一組の法会であり、やがてくる涅槃会を視野に入れて行われた法会であったことを考慮すると、仏生会で釈迦八相図が用いられるようになることによって、次第に涅槃会においても釈迦八相図が用いられるようになってくる。さらに、涅槃会で釈迦八相図が用いられるようになることによって、一面に涅槃図と仏伝図を合わせ描くという発想が自然に生まれて来ると思われるのである。いずれにしても、涅槃図に仏伝図が合わせて描かれるようになるのは、仏生会・涅槃会の実施法が大きく関与しているであろうことを指摘できる。

次に、『欣求靈山講式』に関して考えてみたい。『欣求靈山講式』は靈山会を行うときに用いられるものであるが、靈山会の本尊画とされるものは確実に伝わらない。『欣求靈山講式』の記述を考慮すると、その本尊画像は釈迦が靈鷲山において大乘経典を説法している情景を描いたもので、般若塔のごとき塔が描かれているものという推定が成り立つ。近年知られるようになった奈良国立博物館所蔵の釈迦靈鷲山説法図は、その可能性がある画像といえる。釈迦靈鷲山説法図は、この他に滋賀・常楽寺、広島・持光寺の釈迦八相図のうちの一幅に見られる。いずれも山岳風景が大きく描かれ、山中に塔も描かれている。この塔は先に述べた釈迦の八塔ではなく、『大唐西域記』に説かれる「下乗」と「退凡」と呼ばれる卒塔婆である。『欣求靈山講式』には、仏伝の中の靈鷲山を舞台とした釈迦の活動が述べられており、生涯全体が直接説かれるわけではない。釈迦滅後建立の八塔を通しての仏伝が述べられている。むしろ、『大般若経』『法華経』をはじめとした大乘経典との関係が強調されている。京都・海住山寺の法華経曼荼羅が

該当する可能性が高い。この作品に於いては、法華七喻のような説話的場面は描かれず、釈迦が『法華經』を説く際におきたさまざまな奇瑞が描かれている。すなわち、『法華經』の内容を描いたものというよりは、釈迦が『法華經』を説く場面を強調して描いたものといえる。法華經交相図というよりは、靈鷲山釈迦說法図のヴァリエーションと考えた方が良いと思われる。海住山寺は承元二年（一二〇八）に貞慶により復興されており、この法華經曼荼羅は貞慶による靈山會の本尊として描かれた可能性を指摘できる。こうしてみると、釈迦八相図が靈山會で用いられた可能性もないわけではないであろうが、可能性は低いと考えられる。

以上、不十分なところが多々あるが、本小論においては、明恵の『仏生會講式』を出発点として、仏伝図と講式との関係を検討してきた。仏伝に関する講式としては、本論で取りあげた『欣求靈山講式』『遺跡講式』のほかにも、さまざまな作者による『舍利講式』が多数あり、仏伝図・涅槃図との関係をさらに追求する必要がある。特に源信から貞慶・明恵に至る期間の様相を明らかにすることが重要である。また、釈迦信仰は、弥勒信仰や阿弥陀信仰と関係しつつ行われているので、他の仏菩薩に関する講式にも配慮する必要がある。講式は、さまざまな漢訳經典や論疏を参照して編纂されるが、仏教美術も同様の典拠を指摘することができることが多い。さらに具体的にこれら法會・講式・本尊の相関関係を明らかにし、美術作品の成立の解明に生かしていくことが今後の大きな課題である。

注

(1) 一般的には「八相涅槃図」と呼ばれることが多いが、紛らわしい用語なので、「涅槃交相図」とする。渡邊里志「仏伝涅槃図における図像と画面構成―仏伝図と涅槃図の出会い―」（宮治昭先生献

仏伝図と講式

呈論文集編集委員会編『汎アジアの仏教美術』所収、二〇〇七年、中央公論美術出版）参照。

(2) 山田昭全「仏教と絵解き 講式をめぐる」『国文学解釈と鑑賞』四七巻一一号、一九八二年、奈良国立博物館「特別陳列 講式―ほとけへの讃嘆―」図録（一九八五年二月）、山田昭全「講式―その成立と展開―」（仏教文学講座 第八巻 唱導の文学）所収、勉誠社、一九九五年三月。

(3) 梶谷亮治「総論 我が国における仏教説話絵の展開」（奈良国立博物館編『仏教説話の美術』所収、思文閣出版、一九九六年）、谷口耕生「新薬師寺所蔵仏涅槃図考―中世南都の涅槃儀礼及び舍利信仰との関係を中心に―」（『仏教芸術』第二五一号、二〇〇〇年）。

(4) 山田昭全「一九八二年文献において、すでに『仏生會講式』と本尊との関係が示唆されている。

(5) 渡會正純「大乘寺蔵「仏生會講式」について」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第一四号、一九八二年）、ニールス・グェルベルク「明恵作「仏生會講式」について」（『大正大学総合仏教研究所年報』第一七号、一九九五年）。

(6) 以下、原文は主にニールス・グェルベルク氏文献から引用した。なお、旧漢字は新字に直し、句読点のみを付して、送りがなは省略した。

(7) 『明恵上人資料第二』（東京大学出版会、一九七二年）所収。

(8) 大正蔵第九卷六二八頁中二〇～二二

(9) 山田昭全・清水宥聖編『貞慶講式集』（山喜房佛書林、二〇〇〇年）、一二一～一四二頁（本文）、三〇〇～三〇四頁（解題）。

(10) 東大寺僧・宗性による『讃仏乗抄第八』に般若台の敬白文が掲載されている。『校刊美術資料 寺院篇 下巻』所収、中央公論美術出版、一九七六年。

(11) 『宋高僧伝』所収。大正蔵第五〇巻七一四頁下。

仏伝図と講式

- (12) 大正蔵第一五卷六八〇～六八一頁。
- (13) 大正蔵第一四卷七七八頁上。
- (14) 大正蔵第三卷二九四頁上～中。
- (15) 大正蔵第三卷二九六頁上。
- (16) 大正蔵第八四卷九〇三頁下。
- (17) 源信が『八塔和讃』を作っていたことが知られているが、文章は伝わっていない。また源信は華台院迎講と並んで靈山院釈迦講を行っていたこともよく知られており、これらの信仰は源信以来の伝統を受け継いでいることが推測される。源信における釈迦信仰は、講式・和讃の観点からさらに具体的に明らかにすることが重要であり、今後の大きな課題といえる。八大霊塔については、梶谷亮治『仏伝図の展開―仏教説話絵の表現とテキスト』（『日本美術全集』第九巻 縁起絵と似絵 鎌倉の絵画・工芸）所収、講談社、一九九三年）及び同氏前掲論文に言及がある。
- (18) 渡會正純氏前掲書。
- (19) 泉武夫「円通寺蔵『釈迦誕生図』について」（『大阪市立美術館紀要』第四号、一九八四年）。『仏画の造形』（中央公論美術出版、一九九五年）に再録。
- (20) 渡邊里志前掲論文参照。
- (21) 大正蔵第八四卷八九八頁中。
- (22) 中島博「靈鷲山への道―奈良国立博物館蔵『釈迦靈鷲山說法図』をめぐって」（『奈良国立博物館研究紀要 鹿園雑集』第九号、二〇〇七年）、増記隆介「釈迦靈鷲山說法図」（『国華』第一三六〇号、二〇〇九年）。
- (23) 渡邊里志「平等院鳳凰堂仏後壁前面画の主題―『釈迦八相』としての解釈の可能性―」（『美術史』第一六二号、二〇〇七年）三六六～三六七頁。
- (24) 貞慶には『法華講式』があるが、その式文第五段に「聊造微小

之塔形、敬為道場之本尊。」とあり、塔を本尊としていたことがわかる。『法華講式』と法華經曼荼羅との関係については、貞慶の法華經信仰と関連づけて検討する必要がある、今後の課題としたい。

（本学准教授）